

ヤゴの分際

藤枝 静男

講談社

ヤゴの分際

一九六三年九月一日発行

著者 藤枝静男

発行者 野間省一

印刷所 星野精版印刷株式会社

製本所 有限会社文信社

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽町

電話 東京九四一局三一一一大代表

定価 三六〇円

©1963 Shizuo Fujieda

落丁本乱丁本はお取りかえします

目次

雄飛号来たる

五

家族歴

二五

春の水

三

文平と卓と僕

二三

路

一四

ヤゴの分際

一五

ヤ ゴ の 分 際

雄飛号来たる

牧師の秋田さんは職業に似ぬ癩癪持ちであつた。私の父より五六歳年下の四十前後で、私共は隣同士であつた。大正の初め頃、私は神経質な瘦せた小学生であつたが、ある時一緒に歩いていて親子とまちがえられた、そういう、額に青筋の張つたような長身の人であつた。

教会堂のうしろのせまい空地に牧師館を作つた時、その貧相な、木箱を立てたような二階建ての一部が、斜に私の家の裏庭に、一尺五寸ばかりはみ出したということで父と争つた。秋田さんは一度頼みに来て拒絶されると青筋を立てて帰り、翌日大工を呼んで下の方の一階分だけ、うすい三角形に剥ぎ取らせてしまった。二日ばかりの間、斜めに切りとられた床の間と押入れと、その向うの八畳の畳が私の家の庭に向かって開いてい

た。二階が一尺五寸分だけ突き出してその上に乗っていた。「空気はまだ神様のものだからね」と満足そうに秋田さんは私の頭を撫でて云った。

秋田さんは東京生れの太工の息子であったが、何かの動機で家をとび出し、やがて米国に渡って苦学し、十年ほどすると牧師となって日本に帰った。

秋田さんは、自分が大工の倅であるということに、キリストとの深い因縁と誇りと鼓舞とを感じていらしかった。私の家に今でも一本の太いステッキがある。自然木を磨いて作られ、握りの下のあたり、二行にこまかく秋田さんの刀で漢詩が刻まれている。

荒山秋日午 独上意悠悠

如何望郷処 西北是融州

秋田さんは説教台も自分の手でこしらえた。何日もの日をかけ、たんねんに板をけずり、組立て、そして正面を十字架で区切り、分けられた四つの空間に「神者愛也」という四文字を不折風の書体で刻み、うるしで埋めた。そして毎年クリスマスが来ると、数少ない信徒と私達のような近所の子供を集め、秋田さんはこの見事な説教台の下で、余

興として劍舞をやって見せた。長身の秋田さんは、紋付袴に白いちりめんの兵児帯でふさふさと襷をかけ、大刀を横たえてにこやかに現れた。そして劍舞が終ると次手に居合を二三本抜いて見せた。それから奥さんと並んで腰をかけ、二人の不具の坊ちゃんを一人ずつ膝に抱いて、讃美歌を歌ったり、会衆の祈りを聴いたりしていた。

秋田さんの二人の子供は、どちらも頭の鉢の異様に開いた不具者であった。そして一人は兎唇であり、下の子は啞で足萎えであった。牧師館の玄關のわきに三疊の板の間があった。出口がいつも竹の横棒で仕切られていて、中に腰の抜けた子が這っていた。私が青年になった時、私は秋田さん夫婦にどうしてこんな極端な不幸が訪れたのか、そしてそれなのに秋田さん夫婦がどうしてそれに耐え、いつも神の恩寵を感謝して生活して居られたのか、それは勿論多分キリストの救いによるものであったのだろうが、そういうことを私は苦しく不思議に追想することがあった。實際私の回想の中の秋田さんは、それから肥ってゆったりとした奥さんも、人付合の好い、明るい幸せな人達であった。むしろそれ以上にもっと自由な、そして秋田さんはわがままで短気な人でさえあった。

ただ一つだけ私は忘れられぬ記憶を持つ。ある日私は庭で遊んでいた時、「おでこ転んでも鼻ぶたぬ、雨が降っても傘いらぬ」という嘲弄の歌を大声でうたった。すると不意に垣根の向うで異様な叫び声がし、奥さんが顔を抑えて家に駆け込むのが見えた。

秋田さんは貧乏であった。私の家と教会とは共に旧武家邸で、町の通りとは背中合せに、広い田圃と綺麗な小溝と二間幅の大手道に面して並んでいた。二間道路は教会の前で曲り、松並木となり、田圃の向うの茶畑の丘と城跡の低い石崖の中に入り込んでいた。秋田さん夫婦は、門わきの白い柵の内側の空地に南瓜や馬鈴薯や大根を作り、食糧の足しにしていた。

いつ頃からか、多分牧師館ができた後からか、Kさんという盲目の人が五歳くらいの女の子をつれて、礼拝堂の隣りの暗い小部屋に寝起きするようになっていた。夏の蒸し暑い宵などには、牧師館の八畳間の方に蚊帳をつって、Kさんがおかっぱ頭の子を抱いて寝ている姿を見ることがあった。そして玄関の二畳に蚊やりをたいて、肥った奥さんが、Kさんに話しかけたり足萎えの子供をあやしたりしながら、針仕事をしている

のが見えたりした。

Kさんは秋田さんの旧い友であった。何十年前か前、秋田さんは行いの正しかったKさんを誘惑して何度か遊廓に同行した。Kさんは微毒をしょい込み、その為に盲目となり、細君に逃げられ、秋田さんが牧師となって帰国した時赤ん坊をかかえて僅かに親戚に身を寄せていた。

「秋田君は私の命の恩人です」Kさんはまるで大人に話しかけるような調子で時々私に云った。「私の眼病はどうせ見込みがないのです。大学でもとっくに見離されたんです。何でもアドレナリンが足らないのだそうですかねえ」

私は学校が終えて垣根をくぐったりまきの実をとったりして遊んでいる時、秋田さんが薄暗い会堂の説教台の前の柵に両手を乗せ、ひざまずき、首を深く垂れて祈っている後姿を見かけることがあった。

「きつとKさんの眼病のことかも知れない。片輪者の子供のこともかも知れない」と私は考えた。いつのまにか、或は秋田さんから教わったのか、私は「罪びと」という言葉を

ぼんやりそれに結びつけて考えていた。それは、私が死んだ祖母の口からいつも聞いていた「業」というものどこかで混りあった怖ろしい暗いもののように思えた。貧乏で威勢のいい秋田さんの姿はどこにもなかった。

やがて私が小学五年生になると、私は父の命令で、一日おきに秋田さんの所へ英語を習いに行くようになった。私は日本刀の立てかけられた三角形の床の間の前で、ナショナルリーダーの巻一や、瓜の髭のようになると巻いた装飾文字のペン習字を教えられた。私ののみこみが悪いと、秋田さんは「チェツ」と云ったり「西洋じゃあ赤ん坊でも英語をしゃべるぜ」などとひやかした。

私は秋田さんの英語が流暢であることはよく知っていた。五里ばかり離れた県庁のある町から毎月ウィルキンソンさんという監督のような牧師がやって来て秋田さんと英語で話をする。そして可笑しいことに、それがいつもきまって大声の喧嘩になるのである。会話の四分の三くらいは、早口にまくし立てる秋田さんの声で、残りが「アウ、アウ」というふうにきこえる、ウィルキンソンさんの叫び声であった。そういう会話が私

の家までとどいて来たような日は、私が夜になって勉強に行くと、私の顔を見るなり「ウィルキンの野郎、ナマ云やがって」とまだ昂奮しているのであった。

ウィルキンソンさんの不満は、秋田さんが牧師として最も大切な信徒の獲得に熱心でないという点にあるらしかった。実際子供の私も私の両親も一度としてそれらしい勧めを受けることはなかった。

そしてこの点では、Kさんの方がはるかに積極的であつた。あるいはKさんは、自分がそうすることで、秋田さんへの非難を軽くしようと考えていたのかも知れなかった。

盲目のKさんは、着物の下前がさがって前の少しはだかつた恰好で、娘ののりちゃんに手をひかれてよく外出したが、私が「Kさん、散歩」ときくと、私の声の見当に顔を振り向けて「××へ訪問です。あそこにまだ信仰の固まらない人が居りますのでね」と真面目な返事をしたりした。

彼は五つになるのりちゃん先の導が下手だというのでしょっちゅう叱言を云い続けた。のり子はいつも父親の腰の辺にひき寄せられていて、一刻でも離れると鋭い声

で呼び戻された。Kさんはのり子が何かに心を奪われやしないかといらいらし、絶えず自分のゆるんだ兵児帯につかまらせて、それでも何か不平を呟いて用を云いつけていた。私はのり子ちゃんは孤児院の子供に似ていると思った。彼等は五六人かたまって年に二回くらい、どこからか町にやって来て、町の角に立って太鼓を叩いたりして哀れっぽい歌を合唱してから、私達の家を回って鉛筆や歯磨や仁丹を売って歩くのであった。親方がついて居て売上げは皆とりあげてしまうのだと人々は云った。ある時、そういう彼等を取り巻いて物珍らし気に見物している群の後ろに、私は父の姿を認めた。私は憎悪でかっとなり、父の胸にむしゃぶりついたことがあった。私は恐らくこういう孤児院の子供に似た、ひよわい眼の大きなのり子ちゃんが好きだったのであろう。

「秋田さんは私の命の恩人です」のり子のおかっぱ頭を、大きな掌でくるむような具合に撫でながら、Kさんは度々私にこう云った。すると、私はいつもKさんがそれをのり子のおかっぱ頭に念を入れて教えこむ為に繰返しているように感じ取ったり、又わざと秋田さんに聞かせようとして云ってるように感じ取ったりして、「そんなことわかって